

詩時評

第20回

世界の 知力が低下すると 暗黒時代になる

松本衆司

岡潔と小林秀雄の対談『人間の建設』の中に、岡潔のこんな発言がある。「世界の知力が低下すると暗黒時代になる。暗黒時代になると、物のほんとうのよさがわからなくなる。／真善美を問題にしようとしてもできないから、すぐ実社会と結びつけて考える。それしかできないから、それをするようになる。それが功利主義だと思えます。西洋の歴史だとして、ローマ時代は明らかに暗黒時代であって、あのときの思想は功利主義だったと思います。人は政治を重んじ、軍事を重んじ、土木工事を求める。そういうものしか認めない。：略：世界の知力が低下している。それは音楽とか絵画とか小説とか、そんなところにいちばん敏感にあらわれるのじゃなからうかと思うのです。音楽だって絵画だって、美がわか

らなくなっている。」アメリカのトランプ、イギリスのジョンソン、ブラジルのボルソナロ、中国の習近平、日本のアベ、かつての大坂のハシモト、皆同じ感想を抱く。

このような書き出しにしたのは、河津聖恵詩論集『毒虫』試論序説（ふらんす堂）の読後感による。「1『毒虫』試論序説——二〇一五年安保法案可決以後」より、中程と末尾のほんの一部を引く。

詩を書く者として私は、シユプレレヒコールに属しえなくぐもる声の無音と無調の激しさと深さに共鳴したいと思う。そこには未来の詩表現が胎動している。詩を、そして声を奪う者に対し沈黙の側からあらがう詩が。いきづき、深まり、拡がろうとする詩的あらがいの海が。／詩は「毒虫」の側の側にある。正確には「毒虫の中の人間の声、つまり毒虫化した世界によって、人間のものだからこそ通じないもの、「毒虫」のものとしてしまふ声の側にある。そもそも現代詩とはそのようなものだった。この酷い政治状況に対し、一人一人の詩はどのような「毒虫」に変貌できるか。もはや詩は血や涙のように生まれるしかないが、その煌めきやがて新たな思想と世界の一端を照らし出すまで、詩人は声と声なき声

のはさまで苦悩しなければならぬ。

細見和之詩集『ほとぼりが冷めるまで』（滯標）を読む。「夕暮れは不意に訪れて」を引く。

以前、家族座という詩を書いた／私と妻、ふたりの娘が目に見えない力で引き合つて／ひとつの星座を象つているイメージ／近くに父母の星があることを私は想定していなかった／父が亡くなって／母と妻の折り合いが悪くなった／私と妻のあいだで口喧嘩が絶えなくなった／娘たちは大好きだったクラブをやめた／父の引力が全体を引き締めてくれたのか／アインシュタインによれば／そもそも引力とは時空の歪みに過ぎないのだが……／家族の夕暮れは不意に訪れるものなのだ／星は宇宙にちりぢりに散らばつて／どんな形だったかもう誰にも分からない

人はそれぞれ、過去からの道を歩いて現在にいる。そして、生きることの折々に遭遇する出来事に悩み苦しみながら、いのち果てる未来に向かつて時の道を歩み続ける。答えにならない答えを見出しながら。細見和之という詩人はその切実な生をさり気なく描く。

長嶋南子詩集『海馬に乗って』（空とぶキリン社）を読む。「菜種つゆ」を引く。

むかしの同僚の訃報を聞きました／小さな
事業所なのに／数えると五人目です／わた
したちちようど年ごろ／一月には義弟が
／三月には兄が／父と夫はとうの昔／男は
散り急ぐ生きものなのです／散りかかっ
ている母は／まだ枝にしがみついています
／一〇〇年たつても散らないのです／子犬
が引き綱をくわえて／散歩をせがんでいま
す／始めての春を迎えた子犬は／引き綱を
ぐんぐん引つ張って歩きます／昨夜の雨
で散った花びらの上に／死んだ者たちが立
ち上がっています／わたしを見つめている
のです／気配を感じた子犬は／濡れて地面
にはりついた花びらの上／においを嗅ぎま
わっています

人は生きること、さまざまな悲しみを背
負う宿命を持つ。その切実な現実が、長嶋さ
んの想像力と筆力により、主題に沿ってほど
よく戯画化される。しばし、作品に浸る。

岸田裕史「詩の彩り」（濔標）を読む。詩
集ではなく、ほとんどが詩や詩人まつわる
随想集である。冒頭の序詩「詩のなかの磁性
体」第一連を引く。

詩に残された領域は少なく／何処までが磁
性体なのかよく分からなくなってしまうた
／霞むように磁力が減衰してゆき／磁場の
なかへ／詩の言葉を放射すると／ゆるやかに
電磁波のさざ波が広がる

この序詩に導かれる現代詩と詩的状況への
考察は、折々の出会いの情景とともに適確だ。
氏の個人史の中で出会った詩や詩人に寄り添
う確かな手触りの詩論やエッセイもい。懐
かしく、切なくもある一冊である。

高橋達矢詩集『からだを洗っていると』
（思潮社）を読む。「ちいさな立ち往生」を
引く。

混みあつた改札ちかくで／わたしがよけた
方向に　その男もよけるから／ぶつかりそ
うになつて／ちえつと舌うちしたくなる
ちいさな立ち往生／逆からみれば／その
男がよけた方向に　わたしもよけたから
たぶんその男にとつても／ちえつと舌うち
したくなる　ちいさな立ち往生／急いで
いるのに　朝のリズムをくるわされ／よど
むところに　なにかがあつて／…／そ
の男はたぶん　道をゆずる気よわな人／問
がわるくて　ときどきドジをふむ人／ちい

さな不機嫌を　もらつてしまふ人／似た
者どうしが舌うちしたくなる　ちいさなか
なしみに／…／どうかお元気で　とつぶや
き／職場へ向かつた

PCが生活のツールになりだした頃から、
新型コロナウイルス感染症によるパンデミック
の今日まで地球規模で加速度的に「世間」
が壊れていこうとしている。自己が自己であ
りすぎ、他者が他者でありすぎるのだ。そん
な時代社会のなかで生きる人々にこの詩人の
詩は大切なことを語りかけている。

岡崎葉「愛を待つ」（ウイング出版部）を
読む。「風になつたうた」を引く。

少女の瞳に光っていた／決断を意味するも
の／気づかないまま／ただ通りすぎた／
草むらに座り／花をころろに落としていた
／うつむく少女に／そよ吹くばかりで／
ああ　風になつて戻つて行けたら／あの日
の少女に会えるだろうか？／あれから降
りかかった／たくさんの喜びや不運の／一
つひとつに学び／ときどき　こころを振じ
曲げて／生きてきた少女に／地に届く陽
射しのように／あこがれのひとが来ないか
と／はてなく待ちつづけて／やがて来ない
ひとを遠ざけてしまった少女に／人生に

大きな代償をはらったのだから／呼び戻しに行かなければならない／あの日のかがやく瞳／偽りのないころ／それだけが残ったものなので

この詩集のすべての詩篇に通じる心、それは大切なものを傷つけない優しさであり、それが詩人の言う愛である。人生はややもすると、欲愛や渴愛や愛執に苦しむ。無垢な愛を慈しむ詩集である。

樋口武二「遠い声」(詩的現代叢書)を読む。「待ちつづける、ということ」で、「第三連を引く。

〈待つ人〉と呼ばれるようになった少年は、ただ老いていくばかりである。少年を知る者もしいに少なくなり、少年だった男の存在も、いつしか忘れられていくだけだ。だが、そんなこととはうらはらに、少年は少年のままで、ただひたすらに、その〈人〉を待ちつづけていた。やがてはそれが、村の伝承として、村人の夢の中にも立ちつづけることになった。それまでの長い時間を、老いた少年は、その〈人〉を待ちつづけるしか術がない。辛うじて残された古老たちの記憶は、ばらばらと噂しあうしか方法を知らなかったから、枯れた葦

原を吹く風のようにふらふらと漂うだけのことであった。やがて、少年の存在は忘れ去られたのだが、〈少年〉が立つて居た辻では、いまでも風にまぎって幽かな声が、待っています、と、まるで碑銘のように立ちつづけているのだ

書くことは、瞑想しながら「待つ」ことと同意なのかもしれない。そのことで、遠くにある尊い何かとつながっていられる。樋口武二という詩人の生きる姿勢であろうか。

鎮西貴信詩集「それぞれ願」(土曜美術社)を読む。「闇に包まれて」を引く。

煌めくネオンの下では／いろんな人が行き交っている／疲れて家路を急ぐ人／好奇心に目を輝かせている人／夕刻に起床して仕事に向かう女性／商談と接待に我を忘れている人／明かりの届かぬ暗がり／ときめきを抱き合う恋人たち／別の暗がりでは／企み巡らす人／哀しみを吐き出している人／手の甲で涙を拭いている子ども／頭上には星が微かに輝いている／闇は無表情で安らかだ／深く大きく広がって／赤子のような小世界を撫でている／凡てのものをやさしく包み込み／無辜のせかいに誘う

警句を吐くような、思いに満ちた言葉のあふれた、多様な詩集である。その中に、右のような究極を見据える詩がある。

沢田敏子詩集「一通の配達不能郵便」(編集工房ノア)を読む。「序詩 愛おしい日」を引く。

飽きるほど長い物語だと思ったのに／なにかがっていたみたい／風がページを急いでめくるので／もう読み終わってしまおう／ライフという題の本／あとには／暮らしたままの部屋のようなあとがきと／寡黙な奥付が残されるだけだろう／それがこの本を生きたひとの／存在証明だ／読み始めたのは／たしかに遥かな昔の日だった／その日のことはもうなにひとつ憶えていないけれど／わたしがわたしを読んだように／だれかの手がわたしという本を閉じると／わたしの記憶はだれかの記憶に転写される／この愛おしい日も

本来ならば序詩を引用するべきではない。それを承知でこの詩を引いた。詩は大小なり寓喩や隠喩の味わいを持つが、こんなにさらりと描けるものなのか。無論、人生の感慨を、である。詩集のどの作品も良かった。詩人の実力を見せつけられた思いである。

大橋英人詩集「バスタの羅んぶ」（洪水企画）を読む。「ミサヲさんの彼岸花」を引く。

館にもいろいろあるろが／かたつ端から／くさびのように／先の／とがるもの／ひきつったような手で／なまあつたかいアメをだされても／かすれた声には／およその歳までの／にがい残土が／焼けあとに／昔／隣家に目が半分くさったようにとびだしている汚いなりの婆さんがいた（かなり年寄りにみえたが意外と七〇歳くらいだったのかもしれない）／ミサヲさんはいつもす汚れた同じ着物でズルズル足をひきずるようにして私の家に入りしていた／先立つた一人息子の話 のこった嫁の仕打ち いっそ死にたい 早う逝きたい万作のいるアミダさんのところ 後はいつも目ヤニと鼻ミズ／ああ、またはじまった ボクはわずらわしい呪文のように聞いていた そんなある日のことミサヲさんは／障子の外からすり足で／またくるよ またくるよ／つぶやくように帰っていた／こなくていい こなくていい／ボクは聞こえぬふりをしているっさい返事をしなかった／それからまもなくミサヲさんは倒れ、私の家に／二度とくることはなかった／また来るの またおいでよ／鉛でない／鉛

でない／／ミサヲさんの彼岸花が咲いている

人がいて、思い出がある。そこには当時の「ボク」がいて、風景がある。故に懐かしい。詩人は、人の魂に住む思い出を、「生きる」ということを、独特の筆致で掬い取る。

岡隆夫詩集「吉備王国盛衰の賦」（砂子屋書房）を読む。「美事な巫女じゃ」の一部（第四連〜第七連）を引く。

この布と箸を噛むのじゃ そら 息むのじや／サキ／湯をわかせ 熱湯にするのじや／産着 寝巻 紐はここに置け／そら 息むのじや／赤子は出たいとき 自ずと出てくる／潮の満干に呼応して 痛みはくりかえす／痛みはお中の収縮のせいじや 大丈夫／そら 息まぬと 死産か 蛭子じやぞ／そーら 生まれた！ 赤い髪の子の赤子じや／サキ 後産はこの高床したの／産土に埋めな／産褥が終るまで 面倒みなこれで三度目じやな／よくやった！ おまに見事な巫女じや シヤマンじや／／おまへは神の霊 死者の霊と交われるおまえの御魂は 今後二千年は生きられる 予言もできる だがサキよ 今は赤子の無事を祈れ 神に憑かれて我を忘れ ひたすら祈れ

不思議な存在のサキが古代の地を縦横に行き、歴史の流れを俯瞰し、現代までも見届け、という幻想的物語詩である。豊かな学識をいかにリアルな詩に昇華するか、詩人の人生を懸けた仕事であろう。

個人詩誌「凜々佳」第一号を読む。「幻（ゴースト）」を引く。凜々佳は詩人名でもある。

右の乳房に違和感を憶える／赤ん坊に吸われているようなりズミカルな感覚／くちゅくちゅくちゅと刺激がある／胸をわしづかむと／そこには乳房はもうなくて／ごつごつと肋骨が手に触れる／／左の乳房にゆつくりと手を伸ばす／ひんやりとしてほのかに温かい乳房／羽二重餅のような滑らかさと柔らかさ／手のひらいっぱいになり重みを感じる／／手を離し／しばらく横になっていると／またくちゅくちゅくちゅが始まる／私はゆつくり目を閉じて／何も感じないふりをする

人生の最後にその命を喪失するまで、私たちはどれほどの喪失の悲しみを背負うことになるのか。そのせつない思いが「右の乳房」と「左の乳房」で見事に表現されている。